
Dead in my life

もっち

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

Dead in my life

【Nコード】

N0643Z

【作者名】

もっち

【あらすじ】

日本、何もない平和な国。でも、この国には人知れず特殊な力を持つ能力者がいた。だが、この国には魔王もいなければ、悪の組織もない。ゆえに、それは必要のない力。なのに、その代償はとてつもなく大きくて残酷なもの。それは 人を殺すこと。主人公・白木忠治は気分で路地裏に行く。そこで人を殺していた少女と出会う。このとき、運命の歯車が回った。残酷な宿命を負う能力者である少年少女達はこの力という《呪い》を解くために戦う。

殺人少女との出会い（前書き）

もっちはです。新作です。

殺人少女との出会い

俺はどうしてここに来たのだろう。今となってはコンビニでアイスを買ってそのまま帰ればよかったと後悔している。なんとなく路地裏にまで来てみれば目の前に広がるのは 無数の死体。人間、犬など多岐にわたっていた。

そのまま突き進むと、今まさに人を殺そうとしている一人の少女がいた。

肌色の手は紅色に染まり、エメラルドブルーの瞳には狂気を宿していた。

「ひ、ひ、やめー!!」

男の助けもむなしく首をはねられた。あたり一面に赤い鮮血が飛び散る。だが、少女は気にした様子もなく、むしろ愉快に笑っていた。なのに、その目からは涙があふれ出ている。自分がやっていることがまるで少女の望むことではないように思えた時、俺は悟った。

こいつも俺と同じなのか と

俺は恐れることもなく少女に近づく。少女は俺に問いかけてきた。

「オマ…… エモ…… コイツラノ…… ナカマカ……?」

その問いに答えず俺は彼女に近づく。

「ク、クル…… ナー!」

少女は恐れた様子で俺に襲いかかってくる。俺は特に避けようともせず、歩き続ける。ザシュと音を立て、鋭利な爪が俺の肩をえぐった。俺の顔にも少女の顔にも血が飛び散った。

「ナゼ…… ヨケナ…… イ?」

「避ける必要がないからだよ」

「オマエモ…… ワタシヲネラッテ…… イルノダロ?」

「違う。俺はこんな野蛮な奴らとはな。俺は」

一つ間を空け、こう言った。

「……おまえの仲間だ」

道明かりさえ消えていく中、月光が二人を照らす夜。
俺は少女、ミラン・カティール・イーターは出会った。

殺人少女との出会い（後書き）

読んでくださってありがとうございます。次回も宜しく願います。

もし、よろしければ評価とお気に入りの方もお願いします。

朝の目覚め

小鳥のさえずりと共に俺　白木忠治は眼を覚ました。春とは思えない日差しがカーテンから差し込んでいたおかげで部屋の中は電気を付けていなくても明るいものだった。

まあ、そのため寝汗もぐっしょりとかいていたが……。

「さすがにこのまま制服に着替えるのは、まずいよな」

そう思った俺は一階にあるバスルームに向かう。我が家は両親が海外旅行中なので、朝の風呂には誰も入っていない。それどころか誰もいない。たまに淋しいときがあるが、親がいない生活を俺はそれなりにエンジョイしていた。

目的のバスルームにたどり着いた俺は服を脱ぎ捨てると、肩に巻いてある包帯が目に入る。昨日、ちよつとしたことで負った傷だ。そんなことを忘れていた俺は今さらどうしようかと悩みだす。

シャワーを浴びたら確実に傷に浸みて痛いだろう。だからといって、一浴びして汗を落としておかないと皆に不潔なイメージを与えてしまう。

この二つを天秤にかけると世間体を気にする俺はシャワーを浴びるという選択肢をとった。

「ま、これぐらいなら少し我慢すれば大丈夫だろ」

俺がバスルームのドアを開けると

「フンフンフンフン」

鼻歌をはずみながらシャワーを浴びているミランの姿があった。

一系まとわぬ白くきれいな肌、銀色の髪はさらさらと流れ日光に反射して輝いている。

『――あ』

俺とミランの声が重なる。

すぐにミランの瞳に涙がたまっていることに気付いた俺は速攻で言い訳を始めた。

「え、あ、いや決して狙っていたわけじゃなくてだな」

「い、い、い」

「お、落ち着け！　そ、そうだ！　何か一つお前の好きな物を買って」

「いやあああ！」

欲しいもので氣をごまかす作戦は大失敗だった。

「いたい、いたい、いたい！　悪かったからやめろ！」

「忠治のバカ、エッチ、アホー！」

ミランは矢継ぎはやにどんどんバスルームの中にあるものを投げてる。そのためシャンプーやリンスーがこぼれ出てバスルームが惨状と化す。これはあとで急いで掃除しなければ。今はそんなのんきなことを言っている場合ではないけど

「死ねー！　エロハル！」

ミランが自分の能力　『クーエル・オブ・マターダ・マシーン冷酷なる殺人機』を使って剣にした手を振り回す。

「ぎやああああー！！」

とんだ目覚めの朝だった。

朝の目覚め（後書き）

読んでくださってありがとうございます。次回も宜しく願います。

不法侵入

「すみませんでした」

俺はバスルームの前で土下座していた。相手はミラン。

原因は朝のバスルーム事件だ。幸いにも、いや間違えた。不幸にもミランの裸を見てしまった俺は『レディーの裸を覗くとは破廉恥な奴め！ 私の手で葬り去ってやる』と部屋中を追いかけてまわされ、現在に至る。なにがレディーだよ。自分はまだまだ程遠い体のくせに。

「……誰かが私を馬鹿にした気がする」

「気、気のせいじゃないかな」

「それもそうか」

セーフ。せつかく今度焼肉食べ放題に連れていくと約束して和解に成功したんだ。また、怒らせて俺の財布に大ダメージを与えさせるわけにはいかない。

「とりあえず、私がおしとやかだったから死なずに済んだのだぞ？

そのあたりを感謝するように」

「十分に死にかけましたが」

「ああん？」

「すみませんでした」

あげた頭を再び床につける。

「わかったならもういい。それより朝飯を作ってくれ。おなががすいた」

「自分で作ればいいじゃん」

「もう一度鬼ごっこするか？ 私が鬼役で」

「なんでもないです。俺にやらせて下さい」

あんな地獄絵図みたいなこと二度とごめんだ。

……仕方ない。ほとぼりが冷めるまではミランの言うことに従うことにしよう。

俺は廊下を歩いてキッチンのあるリビングに移動した。

「なぜおまえがここにいる？」

「私がいてはいけない法律でもあるのか？」

「ある。不法侵入だ」

「ちがう。私はドアのかぎを開けて正々堂々と家に入った。コソ泥のような真似はしていない」

「そういう問題じゃなねえよ！」

今、俺と会話しているのは姫月佳奈、中学のころに知り合った俺やミランと同じ能力持ちだ。

髪型は後ろで一つにくくってあるポニーテール。凛とした態度が魅力的なクール系美少女だ。俺たちが通う私立林宮学園りんぐわうでも一番可愛いと名高い。おまけに、料理もできるし、勉強も運動もできるしと世界に誇れる完璧美少女だ。

「どうやってこの家に入ってきた？」

「合いかぎを使って」

「いつの間に作った、そんなの」

「この前、遊びに来た際にこっそり借りていた」

「どおりで家のかぎがないなと思っていたよ！ ていうか、それ以前に犯罪だから！」

「ごめんね。てへ」

舌をペロツと出して自分の頭を軽く小突くと佳奈はパチンとウィンクをした。いつものギャップが新鮮でめちゃくちゃタイプなんだが て、危ない！ だまされるところだった。

「お、俺はそんなことでごまかされないぞ！」

「忠治はこう言うのが好きだと思っていたのだが。……部屋にあるエロ本のジャンルのに」

「おおい！ 人の趣味を暴露するな！」

前言撤回。佳奈は完璧美少女ではありませんでした。

不法侵入（後書き）

読んでくださってありがとうございます。次回も宜しく願います。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0643z/>

Dead in my life

2011年12月5日20時45分発行